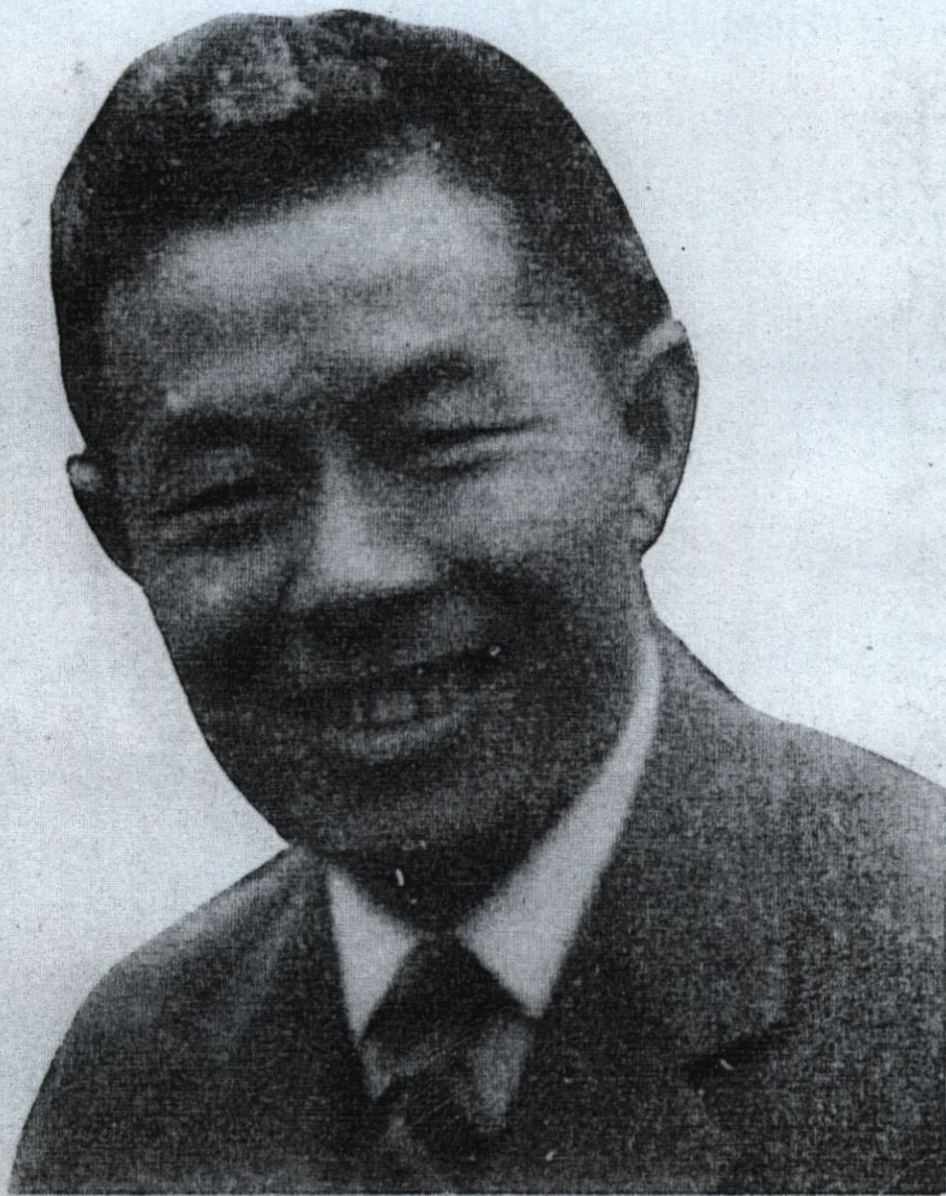


野球史と啄木と

齋藤三郎の世界





目次

写真館	おもな著作	交友録	市井の良心	略年譜
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
04	06	10	12	14

ようこそ 齋藤三郎の世界へ

野球は、いつ日本へ伝えられたのか？

あるいは、

啄木の歌が、なぜ人々の胸に響くのか？

こんな疑問を五十年以上前に解き明かしていた人。  
それが、齋藤三郎（さいとう さぶろう）でした。

彼は、少年のような気持ちから野球史を志し、  
親友のような心で啄木を見つめていたのです。

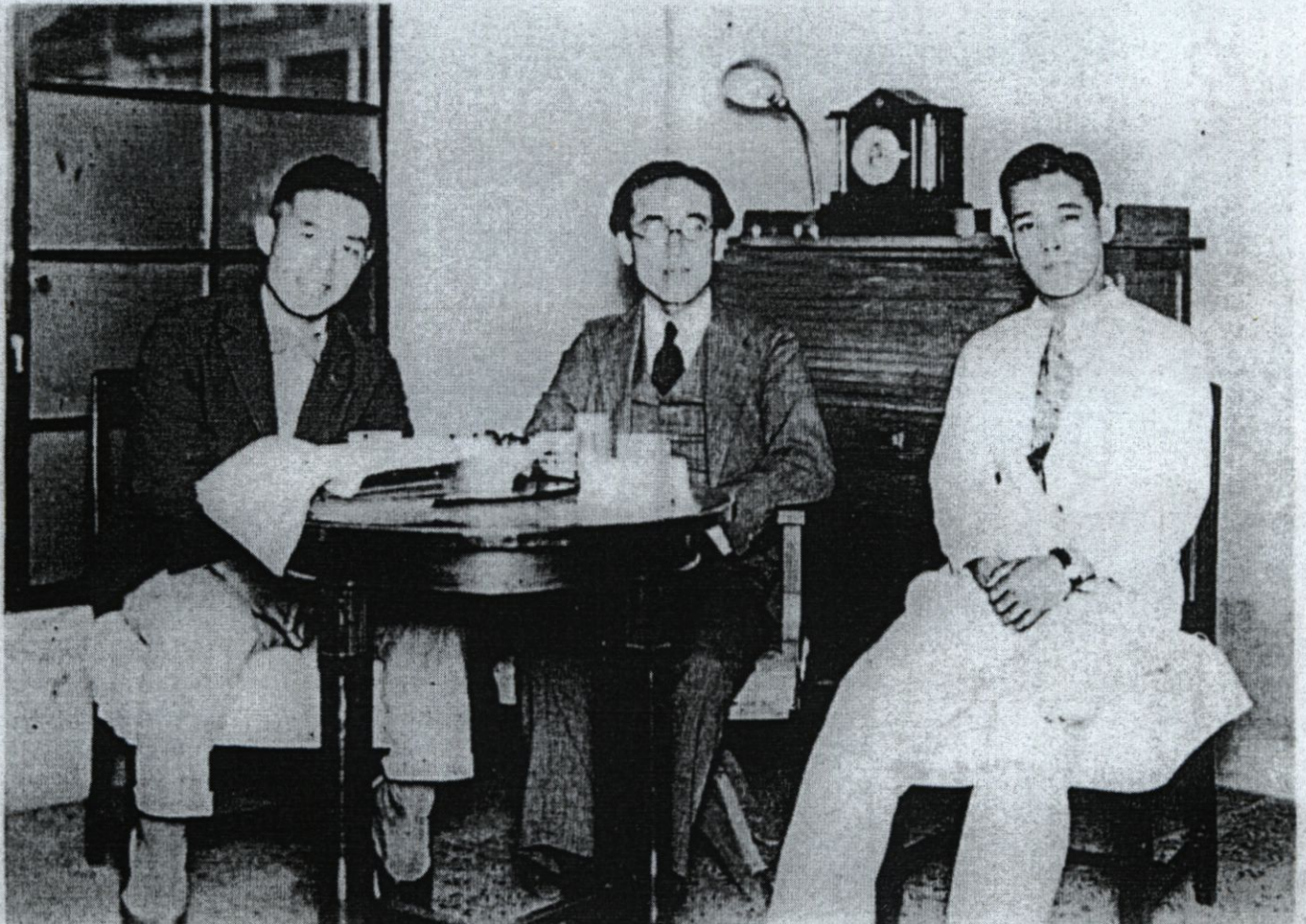
# 齋藤三郎 写真館



若き日の齋藤三郎

此のことは後ねいれし致然考上一いれし事な。  
 故老史の中著「半塔若」はなれし中、大正初を手段歌米中  
 非遊の折、京港で、間成校時代の米人教師ウイルソン氏  
 としはくか会いになつたように、記さるゝいます、その折、  
 ウイルソン氏とか字乘など撮影されなうなことは、いま  
 せんてしなうか。若しそのような字乗がお有りでしたら  
 是非解見致、度、尚、当時の日記、あるはメモ、手簡  
 など、ウイソン氏の位紙などお入りでしなら、教示願、  
 度、お多用中、尚、恐指たら何分よろしく、お返の、  
 せ、重ねこ、おれい、申し上げます。

齋藤三郎の自筆研究メモ



向かって左から 齋藤三郎 青木恭一 島田正吾 (1929年に撮影)  
 青木は1906年頃の慶応の野球選手 島田は劇団「新國劇」の俳優

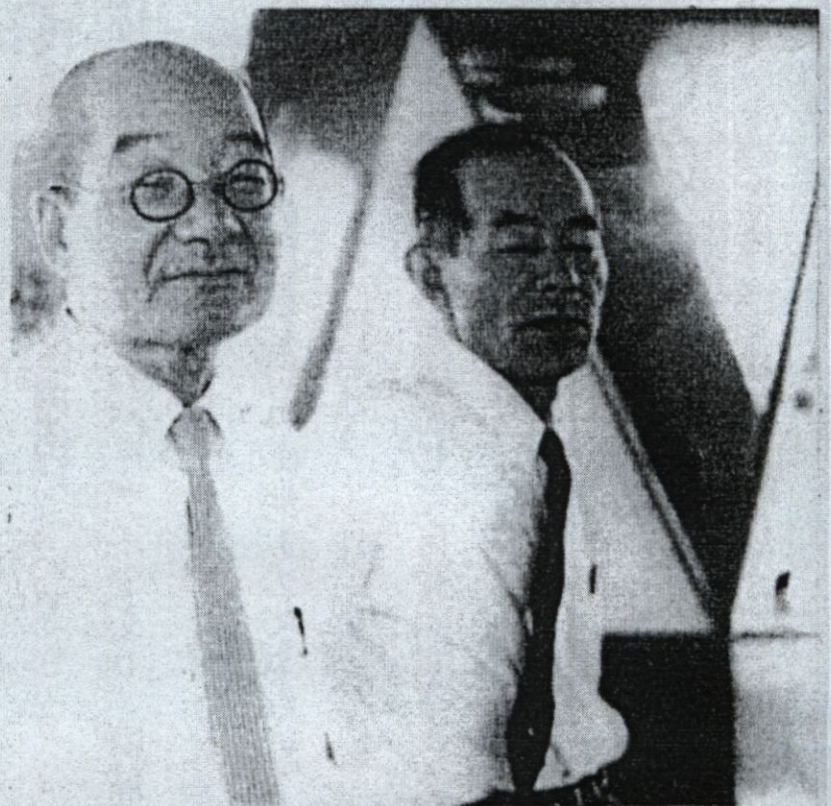


齋藤三郎(26歳) 快心のヒット  
1921年11月 関東実業野球大会 優勝戦  
雑誌「野球界」(1922年1月1日号に掲載)

向かって左から澤田正二郎/正太郎(少年) 詩人サトウ・ハチロー 齋藤三郎  
齋藤は1923年～1929年まで澤田正二郎が主宰した「新國劇」に在籍しました



晩年の齋藤三郎  
『啄木文学散歩』カバー写真より



向かって左が廣瀬謙三 右が齋藤三郎  
廣瀬はスポーツ記録の権威者

齋藤三郎 おもな著作

## 〔野球史研究〕

### 『日本 野球文献解題』

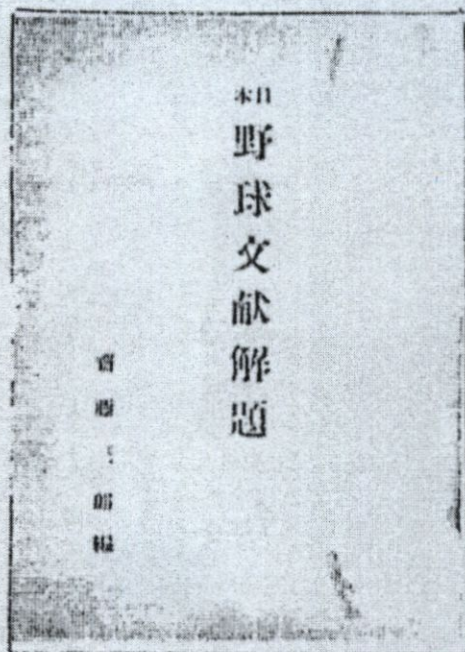
明治初期から大正末年までに発行された174冊の野球書籍を解説した

「野球史研究」の専門書です。

齋藤は、この本のなかで野球史研究を志した理由について

「私たちにとつて野球は心身を鍛えるためのバイブルであり、野球場は人間修業の道場であつた。私が、のちに文献にもとづく野球発達史の研究に思い至つたのは、野球への恩返し以外の何ものでもない」という意味のことを述べています。

1939年8月26日に、50部限定の私家版として自費出版されました。



日本 野球文献解題

齋藤三郎 著

## 「野球の渡來年代に就て」①②③④

日本への野球伝来について、今の定説『1872(明治5)年 伝來說』を



はじめて主張した著作です。

齋藤は、それまで知られていた野球伝来に関する諸説には、どれも確かな根拠がないことを明らかにし、そのうえで独自の「新説」を紹介しました。しかし、発表した当時は、民間研究者の少数意見とされ、何の反響もありませんでした。

1939年12月15日から18日まで、4回にわたり「読売新聞」紙に連載されました。

## 「野球文献史話」 1519



明治期の野球を文化史的な面から取りあげたもので、齋藤の「野球史研究」における代表作として、のちの研究者たちに大きな影響を与えています。

齋藤は、ここでも、野球が、1872年に初めて日本へ伝えられたことを実証し、従来説の誤りを指摘しました。

また、この連載がきっかけとなり齋藤のよき理解者となる君島一郎（明治期に一高の選手であった野球史研究者）との交友もはじまっています。

1952年3月号から翌年8月号まで「読売スポーツ」誌に連載されました。

# 〔啄木研究〕

## 正・續『文獻 石川啄木』

齋藤三郎著

文獻 石川啄木

青磁社刊

齋藤三郎著

續文獻 石川啄木

青磁社刊

## 『啄木と故郷人』 學藝選書 111

長年にわたり齋藤が収集した石川啄木の作品や啄木について書かれた著作をまとめたもので、「啄木研究資料図書室」ともいふべき労作です。齋藤は、このなかで、啄木作品が「どのように発表されていったのか」を新しい資料によって解明しました。また、この本は、その後のめざましい啄木研究の基礎資料としての評価も高く、多くの啄木愛好者に今も利用されています。1942年2月20日に正編、同年の5月18日に続編が、青磁社から出版されました。

石川啄木の故郷・岩手県。そこに暮らす故郷人たちが見た「生前の啄木の





## 『啄木文學散步——啄木遺跡を探る——』（角川新書56）

真実の姿」をあらゆる角度から浮き彫りにしよう」と試みた意欲作です。齋藤は、この本を執筆するにあたり、戦争中の1944年の夏から翌年にかけて三度も岩手県を訪れ、関係者から直接に取材をしました。そして、うちつづく空襲や戦後のあわたたしい混乱のなかで、この本を書きあげました。

1946年11月25日に、光文社から出版されました。

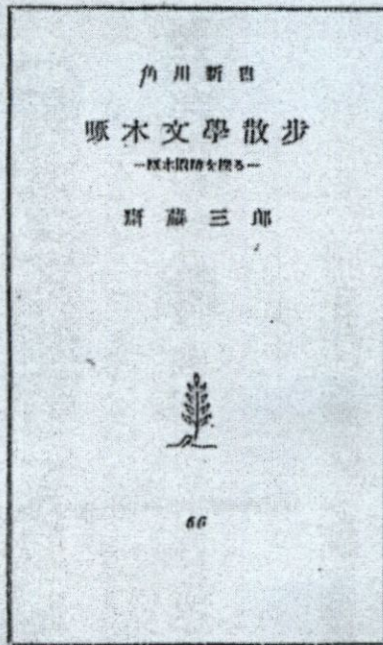
晩年の齋藤が啄木に関係の深い各地をめぐり、その人間性を追及した

「啄木研究」の入門書です。

この本の一節で、齋藤は多くの人が権威者の指摘や解釈を安易に受け入れてしまう傾向を問題にして、自分自身の体験をもとに

「二度定説化してしまうと、それをくつがえし、或いは是正することが如何に至難であるかは一度でも経験したほどのものなら領（うなず）けると思う。」と書き遺しています。

1956年11月30日に、角川書店から出版されました。



# 齋藤三郎 交友録

## 〔野球史研究〕

君島 一郎



『私の銀行ライフ』  
(1974年/君島一郎)より

きみじま いちろう (1887~1975)

明治期の一高の野球選手。日本銀行の出納局長・文書局長や財団法人友邦協会の理事などを歴任。

君島は、著書『日本野球創世記』(1972年/ベースボールマガジン社)のなかで、齋藤との初対面の印象を

野球の故事についての蘊蓄の深いこと、集めてある資料の豊富なこと、それにも増して野球に対する愛好、情熱の高いこと。成る程文献史話を草するだけのこととはあると感心した。と綴り、今後もしも日本野球の故事探究の志を有する方々があつたら、是非にも彼齋藤三郎の二つの作を一読されんことをお勧めする。と書き遺しています。

サトウ・ハチロー



「谷中・根津・千駄木」其の四十五  
(1995年12月27日発行)より

さとう はちろう (1903~1973)

詩集「おかあさん」、童謡「ちいさい秋みつけた」や歌謡曲「りんごの歌」などで知られる詩人。

若き日に「新國劇」野球部でも活動していたサトウは、著書『青春野球手帖』(1949年/石狩書房)のなかで、

いま啄木研究者としていい本を出している齋藤三郎が投手でボクが捕手だった。齋藤は、ワセダあたり(を)ぶらぶらしていて、すし屋のチームとか、職人団チームなどのおやとい選手をしているうちに、新國劇に見いだされて主将兼投手となつたのだ。と書いています。

## 〔啄木研究〕

### 吉田 孤羊



『岩手の近代文藝家名鑑』  
(2003年/浦田敬三)より

よしだこよつ (1902~1973)

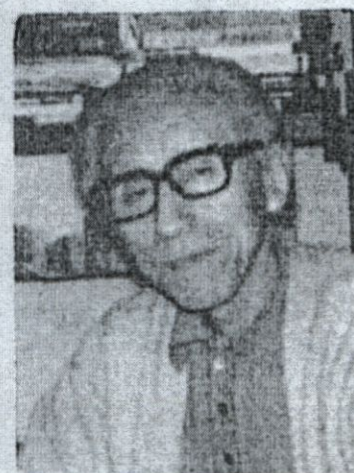
啄木研究の先駆者。雑誌「改造」の記者などを経て岩手県立図書館副館長や盛岡市立図書館の館長を歴任。

吉田は、著書『歌人啄木』(1968年/洋々社のなかで、

たしか昭和七、八年ころではなかったかと思つ。  
ある日、私と同年輩で、新国劇の文芸部に つとめた  
という人が訪ねて来た。

「私ははじめ、啄木をあまり好きでなかったのです  
が……」といつきり出して初対面の挨拶をしたのは、  
長野県の生れたという齋藤三郎君であった。私はこ  
の齋藤君と知り合つて、はじめて身近に同志を得た  
力強さを感じたものであった。と書いています。

### 川並 秀雄



『啄木の風景』  
(1995年/天野仁)より

かわなみひでお (1901~1984)

石川啄木や小林多喜二などの研究者。欧米の大学の客員  
教授や大阪商業大学の教授などをつとめる。

川並は、著書『石川啄木新研究』(1972年/冬樹社  
のなかで、

おもえば、齋藤三郎君との交りも随分長いもの  
であった。と回想し、 齋藤君は、せまい一室を  
借りて、うずたかく積みあげた書物にとりかこま  
れて、小さな机で謄写版の原紙を切つて古書目録を  
つくり、通信販売をやりながら細々と一人暮らしを  
して、野球の資料と明治文学関係のものを集めて  
いた。と書いています。

# 齋藤三郎 市井の良心

(齋藤三郎―知の清流「歴史読本」1999年11月号より)

齋藤三郎の生涯は、華やかな光をあびることはありませんでしたが、確かな恵みに満ちています。

それは、人知れず流れる清流のように探し求める者だけに姿をあらわします。

野球史研究の『日本 野球文献解題』、啄木研究の正・續『文献 石川啄木』や『啄木と故郷人』、『啄木文學散歩』などは、その例です。



齋藤が野球と出会った市川小学校  
『市川っ子』(2007年/野沢温泉村立市川小学校  
閉校記念事業実行委員会記念誌編集部編)より

齋藤三郎の心の原点には、少年の日に合った野球への感激がありました。

まだ、素手野球の時代であった頃、仲間たちと掌の痛みも忘れ、硬いボールを追いか

けた思い出が、齋藤の宝物でした。そんな彼の性格は、素朴で無口でしたが、初対面の相手さえ親しみを感じさせる人柄で、そばと和菓子が好き物でした。

齋藤の研究は、徹底した調査にもとづき文献による実証をめざしていました。しかし、書物だけでは実感できないと、明治時代の野球選手から直接に体験談を聞いたり、戦争中さえも啄木研究の取材旅行をくりかえしています。

そして、野球への「感謝と恩返し」の気持ちから野球史を志したという齋藤は、どの分野でも自分の名誉や野心から研究成果を発表し続けたわけではありません。

それは、無理解や無関心により風化していく真実を市井の立場から訴えることでした。

たとえば、野球伝来の時期について、現在の定説である「1872(明治5)年説」を最初に提唱したのも、彼です。

齋藤は、1939年に新聞の連載記事で、1872年にホーレス・E・ウイルソンが初めて日本に伝えたとする「野球伝来 明治5年説」を発表しました。

それは、あいまいな言い伝えによる従来の「6年説」とは違い、膨大な資料調査をもとにした確かな結果でした。

さらに、1952年には、代表作「野球文献史話」を発表。ここでも「5年説」の実証と「6年説」の誤りを指摘します。

しかし、どんなに力説しても肩書きのない彼の研究に反響は少なく、一般には、根拠のない「6年説」が、長く信じられていました。

齋藤の主張が正当な評価をうけるのは、彼の没後12年目の1972年に、名門野球部の出身者・君島一郎が書いた野球史の本(『日本野球創世記』)が出版された以後です。

わずか一年の違いを修正するために、研究者たちは30年以上の歳月を要しました。

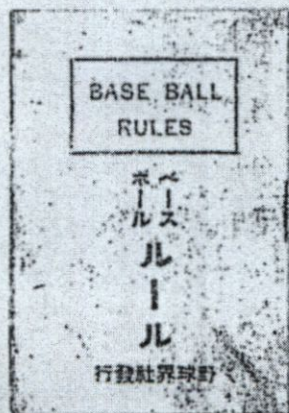
しかも、「5年説」は齋藤の功績ではないとする考えが、今も後を絶ちません。

\* \* \*

いち早く野球資料室の構想をもっていた彼の夢は、財団法人野球体育博物館として実現しました。そこには、様々な困難のなかで収集された齋藤の蔵書も寄贈され、今も探究者を待っています。

「最も良心的」な研究者とも評される齋藤三郎は、どんな研究でも、ひるまず、あきらめず、妥協もしませんでした。

ただ、自分自身の良心と徹底した実証による確信をもとに、静かに挑み続ける人生でした。



齋藤が収集した蔵書の一部

# 齋藤二郎 略年譜

西暦 満年齢

できごと

- 1895年 00歳 八月二六日、長野県下高井郡市川村(今の野沢温泉村)虫生で生れる
- 1910年 15歳 三月、村立市川尋常高等小学校高等科を卒業
- 1913年 18歳 この年に上京
- 1923年 28歳 澤田正二郎の「新國劇」に入団。文藝部に在籍
- 1929年 34歳 日本初の本格的な野球演劇「早慶戦時代」の脚本を執筆。七月、本郷座で初演
- 1932年 37歳 十月、ヨツヤ商店で販売の「ホームランボール」で実用新案を取得
- 1935年 40歳 この年頃、明星堂書房を開業し古書の目録販売をはじめ
- 1939年 44歳 八月、『日本野球文献解題』(私家版・限定50部)を出版
- 1942年 47歳 二月、『文献 石川啄木』 五月、『續 文献 石川啄木』を出版
- 1946年 51歳 十一月、『啄木と故郷人』を出版
- 1952年 57歳 三月、『読売スポーツ』誌に「野球文献史話」の連載を開始
- 1956年 61歳 十一月、『啄木文學散歩』を出版
- 1959年 64歳 七月、財団法人 野球体育博物館の嘱託となる
- 1960年 65歳 二月二日、東京都文京区高田老松町の自宅で急逝



ヨツヤ商店「ホームランボール」パンフレット(1931年頃)



「早慶戦時代」の脚本「週刊朝日」第15巻第29号 掲載

この小著をつくるにあたっては、

齋藤三郎の御実弟・齋藤恒吉様、御実妹・齋藤くめ様をはじめ、  
齋藤研究の第一人者で作家の横田順彌様、

御親族の齋藤善久様、齋藤正一様、齋藤由紀夫様、

市村良江様、宮崎一雄様、その他の齋藤三郎にゆかりのある

皆様からあたたかい御厚情をいただきました。

あらためて心より御礼を申し上げます。

◇写真や記事の無断転用を禁じます。

◇原則として常用漢字・現代かなづかいを用いましたが、

人名・引用文など一部については、例外もあります。

『野球史と啄木と 齋藤三郎の世界』

発行…2008年2月29日

著者…弘田 正典(ひろた まさのり)